

## モネタの系譜——キーツの女性観の一面

吉 賀 憲 夫

### The Pedigree of Moneta : An Aspect of Keats's Image of Women

Norio YOSHIGA

Though he could make a great success of creating the so-called "Fatal Woman" in his poems, Keats also presented us another type of women such as Moneta in *The Fall of Hyperion*, Mnemosyne in *Hyperion*, Angela in *The Eve of St. Agness*, Peona in *Endymion* and so on. In general, they are not young beautiful lovers but merciful guardians of the heroes in Keats's poems. Moneta, for example, encourages the poet of the second *Hyperion* to climb the steps of an altar to become a true poet.

Keats, according to Aileen Ward, is said to keep two kinds of images about women in his mind; one is his mother's and the other, his grandmother's. Keats, consciously or unconsciously, wanted the two types of women in his actual life. The most important women he made the acquaintance of were Jane Cox, Isabella Jones and Fanny Brawne. It can be said that the images of his mother, Jane Cox and Fanny Brawne were crystallized into his "Fatal Women" and the other image and the other women helped him to create Moneta and the others.

I have a triple soul! Oh, fond pretence—  
For both, for both my love is so immense,  
I feel my heart is cut for them in twain.  
*Endymion*, IV, 95-7.

#### 1

「宿命の女性」というものは、一人ロマン派の占有物でなく、あらゆる時代を越え普遍的な存在として文学が関わってきた主題であり、実に多くの詩人や作家がこの種の女性を扱って来たが、しかしジョン・キーツもいわゆる「宿命の女性」をその作品の中で数多く描き、永遠化することに成功した詩人の一人であろう。短いバラッド“La Belle Dame sans Merci”における美女はその典型であり、*Lamia* や彼の主たる主題とは少しそれるにしても *Endymion* における Circe もまたそうである。確かにキーツは宿命の女性を描き、それに成功した。しかし彼はただ自己を破滅に導く美女のみを描いたわけではない。その様な抵抗できない美しさを有した宿命の女性を描いたかわら、彼はもう一群の女性達を描いている。すなわち *The Fall of Hyperion* における Moneta に象徴される女性達である。

本稿においては主として Moneta に代表される一群の女性像の意味について考察することになる。彼の作品

に現れた女性の外、かれの実生活において彼がかかわった女性達にも言及しなければならない。そのためにはキーツの伝記にも立ち入らねばならないだろう。また先に述べた「宿命の女性」との関係、*Endymion* における唐突なハッピー・エンディングという処理のされかたを考慮にいれながら明らかにし、あわせてキーツの精神に生じた女性の意味を考えてみたい。

#### 2

キーツの作品に現れる女性は大別して二に分けることができよう。一つは先に述べた“La Belle Dame sans Merci”に代表される「宿命の女性」のグループであり、もう一つは *Endymion* における Peona, *The Eve of St. Agness* における Angela, *Hyperion* における Mnemosyne, そして *The Fall of Hyperion* の Moneta といった女性（もしくは女神）である。注意すべき点は、これらの女性は他の「宿命の女性」系の女性のように彼の作品の中で最重要な役割は与えられていない、ということである。*Endymion* における Peona は主人公の悩みを聞く彼の妹であり、老女 Angela は Madeline の乳母、記憶の女神 Mnemosyne は Apollo にとって彼を神とする、言わば第二の母である。また Moneta は残されている断片の中では大きな役割を負っているが、果してキーツが

意図した作品全体の中ではどうであろうか、そこは不明ではあるものの、推測できる範囲では *The Fall of Hyperion* を語る詩人に警告を与え、彼に真の詩人としての自覚を与える役に過ぎない。彼女らに共通することは、常に主人公を助け、補佐し、その成長を見守る立場であるということである。また同時に彼女達は主人公達の愛、すなわち「性愛」の対象ではないということは特に注目してよいことであろう。

主人公の性愛を基調とする愛の対象である、美しく妖しく、また自己を破滅に導く危険な存在である女性と、主人公と兄妹とか乳母といった非性的な愛、言い換えれば肉親的愛でもって結ばれている女性という二つの種類の女性を彼は描き出しているのだが、この肉親愛を象徴する女性の代表としてまず *The Fall of Hyperion* の Mometa の意味を考察することから始めたいと思う。

*Hyperion* の改作である *The Fall of Hyperion* を語る時前作 *Hyperion* を無視することが出来ないように、*Hyperion* における Mnemosyne をの役割を考慮にいれないで Moneta を語ることはできないであろう。すなわち記憶の女神でありミュージズの母である Mnemosyne は *Hyperion* では同時に Apollo を神とする役割を演ずる。そのように Moneta も夢想家にしかすぎない語り手の詩人に、真の詩人へと至る不滅の階段を示し、彼に本当の詩人とは何かということを説くのである。*Hyperion* にあっては Apollo は “Die into life” と表現されているように、象徴的な再生を「巨大な知識」を得ることによって果たすのである。一方もう一つの *Hyperion* では「詩人」は「不滅の階段」を登ることによりそれをなすのである。従って基本的に二柱の女神は同一のものと言ってよいし、事実キーツ自身も両者を同一視していたようである。それはこの二つの *Hyperion* において女神は共に「記憶の女神」と呼ばれていることから解るであろう。

Mnemosyne は Coelus と Terra の娘であり、Jupiter とのあいだに九人のミュージズをもうける。すなわち彼女はミュージズ達の母であり、Mnemosyne の意味は「記憶」である。その意味で、キーツは正しく彼女を理解している。しかし Moneta に関しては彼は混乱していると言わざるを得ない。二人の女神を基本的には同一視しながらも、*The Fall of Hyperion* において Moneta にした理由は Mnemosyne で表現するには不十分な Moneta に与えられた新しい意味のためであることは容易に想像できるであろう。それは前者にあっては Apollo の神としての再生が Mnemosyne を介して Apollo 自身の中で自動的に起きるのであり、その意味においては Apollo の神への再生の時の “Die into life” という体験は一種のいわゆる「通過儀礼」にすぎないであろう。これにたいして

後者の場合、詩人は Moneta の警告もしくは忠告により不滅の階段を登るのである。そのとき詩人が経験する「死」は彼の選択の一つとして厳として存在するのである。そのような詩人としての「生」と「死」という二者択一を忠告と警告とで詩人に迫るのが Moneta に与えられた新しい意味あいと言えよう。そしてその時、Moneta の語源の意味が「忠告する」、「警告する」という意味であることは重要であろう。また神話辞書においても “Moneta, a surname of Juno among the Romans. She received it because she advised them to sacrifice a pregnant sow to Cybele, to avert an earthquake.”<sup>1)</sup> とあるように Juno の別名であり、それも地震を避けることの忠告により、忠告者とも言うべき “Moneta” という名が Juno に冠せられたと言うことも「忠告者、警告者」としての Moneta を印象づけるであろう。

断片に終わっている *The Fall of Hyperion* において詩人と Moneta とのやり取り、すなわち詩人とは何かという根本的な問題にたいする議論は真剣であり、純粋であり、かつキーツの求道的態度をよく現している。そこからは彼の有名な詩句を幾つでも取り出せるであろう。例えば

‘None can usurp this height,’ returned that shade,  
‘But those to whom the miseries of the world  
Are misery, and will not let them rest.’

*The Fall of Hyperion*, I, 147-9.

という詩句はその中でも最も有名であるかも知れない。確かにある読者にとってこの様な「思想」へのキーツの到達は、まさに彼の「偉大さ」の証左となるものであろう。John Middleton Murry はこの引用の箇所をもって “Keats has passed now clean out of Wordsworth’s range. In Shakespeare, and in Shakespeare alone, can be found the full equivalent of this deep knowledge. Keats has left far behind that younger Keats who had reached the point that Wordsworth reached in Tintern Abbey, and which Wordsworth himself was never to pass beyond.”<sup>2)</sup> とキーツを激賞する。

しかし一方で T. S. Eliot は “Keats seems to me also a great poet. I am not happy about *Hyperion*: it contains great lines, but I do not know whether it is a great poem.” と *Hyperion* には疑問を差し狭むのである。もちろん彼は *Hyperion* と言っているのであって、決して *The Fall of Hyperion* とは言っていない。しかし Eliot の言う *Hyperion* とは二つの *Hyperion* の両者を言っていると解釈しても良いであろう。何故なら Eliot の

コンテキストから言うと、キーツの名声を支えるものは Ode 群に象徴される叙情詩であり、それ以外のいわゆる「思想」であるなら彼の書簡集に遙かに良く書き表してあるということになり、*Hyperion* およびその改作である *The Fall of Hyperion* も、少し乱暴な推測になるかも知れないが、彼は所詮同じものと考えたであろうと考えられるからである。いずれにしても Eliot にとって、キーツの天才は二つの *Hyperion* に現れた「思想」や思想の「セオリー化」にあるのではない。むしろキーツにとってその種の「セオリー」は最もキーツ的でないと Eliot は考えたのであった。

Wordsworth had a very delicate sensibility to social life and social changes. Wordsworth and Shelley both theorise. Keats has no theory, and to have formed one was irrelevant to his interest, and alien to his mind.<sup>3</sup>

このような Eliot の主張から見れば、*Hyperion* も *The Fall of Hyperion* も等しく彼の好みには合わないことは明白であろう。

*The Fall of Hyperion* における Moneta と詩人との会話をどのように感じるかという例を、上島建吉氏から引用してみよう。

モネータと詩人との対話をここにながながと引用したのは、これがキーツのたどりついた最高の思想であるとして、多くの批評家が問題にする個所だからである。なるほどここには考えさせられるいろいろな問題が含まれている。ここには詩人の使命を自覚した力強い調子があり、また一方では、キーツの精神的、肉体的苦悩をうかがわせるような、沈鬱なおもむきもある。私は決してここに至ったキーツの詩人としての、また人間としての心的苦闘を過小評価するものではない。けれどもこれらの詩句を「構造」<sup>ストラクチャー</sup>の面で受け取った場合、そこに何となく幼児的な匂いを感じるのは私のみであろうか<sup>4</sup>。

氏はこの対話になにか「幼児的な匂い」をかぎとっている。これはまさにあの Eliot の言わんとしたところのものであろう。私もまたその「幼児的な匂い」を感じる一人である。この「幼児的な匂い」に対する氏の結論も興味深いものであるが、今ここではふれない。しかしこの「幼児的な匂い」を手がかりに、本稿では、詩人と Moneta との関係は如何なるものか、しいてはキーツにとって Moneta 的女性とは、すなわち警告する女性とは

何であったのかということを考えてみたいのである。

Moneta と詩人との対話に漂う「幼児的な匂い」は何処から来るのであろうか。それは Moneta 自身の言葉よりもむしろそれに対する詩人の過剰な反応と、反駁から来るように思える。彼らの会話から印象づけられることは、神と人間との対話にしては、詩人側が少々感情的過ぎる観がある。すなわち神と人間との関係からすれば、詩人の言は不遜にあたりはしないかということである。もしそれが不遜に当たらないとすれば、それはもっと違う両者の関係のうえに許容されていることにならないであろうか。

最初の *Hyperion* との関係は一切無視して *The Fall of Hyperion* だけを読んだ場合、多分何故詩人に警告する神が「女神」でなければならぬのか、その必然性に関しては疑問が起きるのであろう。両者の間に交わされる対話の内容から見ると、神の側が「女神」でなくてはならない理由はない。むしろこのような会話は男の神とこそふさわしいものではないであろうか。もしそうであったら、あの「幼児的な匂い」もいくぶん緩和されたのではなかろうか。

詩人の会話の相手が「女神」、すなわち「女性」であるということこそ、最も重要な点である。二つの *Hyperion* で一貫していることは Mnemosyne と Moneta という女神の立場とその役割であり、基本的には Moneta は Mnemosyne の役を引き継いでいる。それではここで Mnemosyne の *Hyperion* における役割と意味を見ておこう。もちろん彼女の使命は Apollo を神とすることである。では何故彼女がその任に当たるのであろうか。彼女は Apollo に次のように自己を語って言う。

Explain thy griefs

To one who in this lonely isle hath been  
The watcher of thy sleep and hours of life,  
From the young day when first thy infant hand  
Plucked witless the weak flowers, till thine arm  
Could bend that bow heroic to all times.  
Show thy heart's secret to an ancient Power  
Who hath forsaken old and sacred thrones  
For prophecies of thee, and for the sake  
Of loveliness new born.

*Hyperion*, III, 70-9.

ここから解することは、彼女は Apollo を彼の幼い日々から常に見守ってきた女神であり、彼が神となることを予言するために一切を棄てた女神であるということだ。すなわち彼の成長を見守った母親にも似た立場であるとい

うことである。ただ留意しなければならない点は、Apolloの真の神としての二度目の誕生に彼女が立ち会うということであり、その意味するところは、実の母というものではなく、むしろ育ての親とでもいうべき存在であるという印象が強いということである。この母性的な性格はMonetaにも引き継がれているのであり、Monetaと詩人との間の対話に臭ってくる「幼児」性につながるのかも知れない。

*The Fall of Hyperion* においてはMonetaは*Hyperion*のMnemosyneと同様Apolloの養母として位置づけてあるということは、詩人がMonetaに“By great Apollo, thy dear foster child.”<sup>5</sup>という誓いの言葉を使うことから明かである。このことは詩人とMonetaとの関係をも暗示するといえよう。何故ならMnemosyneとApolloの関係は、第二の*Hyperion*ではMonetaと詩人との関係に割り当てられていることは、その構造上明かであるからであるからだ。またApolloは詩人達の神であり、真の詩人の象徴でもある。とすればMonetaに真の詩人の道を示される詩人は、ある意味では明らかに神となる前のApolloを暗示するものである。ゆえに大きな意味では、詩人とMonetaの関係も養母と養子の関係であるということができよう。この様に見てゆくとMonetaの詩人へと語りかける言葉は母性を帯びた言葉であり、詩人がMonetaの語り終わった時の印象を“As near as an immortal’s sphered words / Could to a mother’s soften, were went.”<sup>6</sup>と表現しているのは、その良い証明となるだろう。この両者が広義の親と子という関係にあると考えれば、そこにいわゆる「親」に対する「子」としての甘えという一種の「幼児性」が現れてもそれは決して奇妙などにはならないであろう。この二人の対話が、神と人間のそれとしたならば、詩人の言葉はやや不遜と取られてもしかたがない。しかしこれが母子という関係であればそれも許されるのかもしれない。

### 3

MnemosyneとMonetaに母というイメージを見て来たのだが、このイメージはいわゆる「宿命の女性」、キーツにおいては“La Belle Dame sans Merci”や*Lamia*に代表される女性像、とはまったく異なるタイプの女性であることは確かだ。我々がキーツの伝記を調べるとき、彼の人生の極初期に父を、そして続いて母を亡くしているという事実を知らされるのである。

伝記によれば彼の父は八歳のとき事故で死亡し、母(Frances)はすぐWilliam Rawlingsなる男と結婚してしまったのであった。その結果残された子供達は祖母

(Alice Jennings)の手によって育てられることになる。この男の目的が、彼女の財産目当てのものであったことはその後の進展からおおよそ見当はつくのである。Francesは棄てられ惨めな境遇におちいり、病を得て実家へと帰ってくる。その母をキーツはけなげにも献身的に看護したと伝記は伝えている。彼女は1810年彼女の実家で息を引き取った。キーツ兄弟姉妹は1814年の祖母の死後は彼女の残してくれた年金で生計を立てることになる。

詩人John Keatsにとってその後母及び祖母という存在は彼の心の中で女性というもののイメージの形成に重大な影響を与えたように思える。Aileen Wardはその著者*John Keats: The Making of a Poet*の中で、その間の事情を次のように分析している。

But Alice Jennings immediately picked up the broken pieces of their lives. Soon after her husband’s death she took a house in Edmonton, a village about four miles from Enfield, and here Keats found a second home. Mrs. Jennings became a second mother to him, winning from him a devotion very different from the love he had felt for his mother, yet almost as deep. The fact that Keats had two mothers during his boyhood—one young, beautiful and unreliable, the other much older, equable and affectionate—is worth nothing. It helps explain a division in his nature which appeared later in many forms, one being a tendency to be drawn toward two quite different types of women—flirtatious young beauties and serious young ladies, sexually much less challenging, often several years older than himself.<sup>7</sup>

キーツの心に二人の母が存在し、それが後彼の女性に対する好みに少なからず影響を与えたというWardの指摘はまことに興味深いものがある。キーツ自身は身長があまり高くないという劣等感のためか、女性に対しては少々消極的な面があったが、それでもロンドンに出て来てからは弟Georgeの関係のWylie家やMathew家、またReynolds家の娘たちと知合いになっている。またDevonではJeffrey家の娘たちとも親しく交際していたようで、“Where be ye going, you Devon Maid?”という小曲を作っている。しかし彼女らはいずれもキーツの心を強く魅了した女性とは言いがたい。では彼が多大な関心を払い、注目した女性とは一体誰であったのか。今、その答えとして三人の女性の名前を挙げるができよう。すなわち彼女らとはJane Cox, Isabella Jonesそし

て Fanny Brawne の三人である。またこれら三人は三者三様にそれぞれキーツの人生の折々に於て大変重要な、また特別の意味を持った女性であった。

Jane Cox は弁護士で文人でもあり、キーツがその生涯に於てもっとも信頼を寄せた友人の一人、John Hamilton Reynolds の娘達と従姉妹の関係にあたる若く美しい女性で、キーツは

She (Jane Cox) is not a Cleopatra ; but she is at least a Charmian. She has a rich eastern look ; she has fine eyes and fine manners. When she comes into a room she makes an impression the same as the Beauty of a Leopardess. She is too fine and too conscious of her Self to repulse any Man who may address her — from habit she thinks that nothing particular. . . I always find myself more at ease with such a woman ; the picture before me always gives me a life and animation which I cannot possibly feel with anything inferiour. . . I forget myself entirely because I live in her. You will by this time think I am in love with her ; so before I go any further I will tell you I am not — she kept me awake one Night as tune of Mozart's might do.<sup>8</sup>

と手紙の中で彼女を表現している。多分この様な彼の賛辞は、彼の恋人 Fanny Brawne へのそれを除けば、最大級のものと言ってよいであろう。雌豹に、またモーツァルトの音楽に例えられたこの女性は、キーツの弟夫妻に宛てた手紙の中で “I should like her (Jane Cox) to ruin me, and I should like you to save me.”<sup>9</sup> と形容されている。これはまさにキーツが自らの破滅をも辞さない美女というわけである。Jane Cox とは明らかに「宿命の女性」の系譜にあたる女性であったことは確かである。

Isabella Jones はキーツが弟 George に手紙の中で “the lady from Hastings” とだけ記している「謎の女性」である。この女性は実に美しくかったといわれているが、彼よりも年上の人妻であり、キーツにただ単に男女間の事柄だけでなく、また多大の文学的刺激を与えた女性であった。彼女は *Endymion* および1820年の『詩集』の出版者である John Taylor と親しく、彼が主催する文学サロンにも出入りしていた文学愛好家であった。この二人の愛情面での関係をここではあれこれと詮索することはしない。しかし彼女がキーツの詩作上に与えた影響は、甚だ大だと言わざるを得ない。*The Eve of St. Agnes* は Isabella Jones に勧められ書いたものであることは良く

知られている。またいわゆる “Bright Star Sonnet” が Fanny Brawne にまつわる作品なのか、それとも Isabella Jones と関係のある作品なのかということが議論されたが、結論がどうであれ、やはりキーツにとってはかなり重要な女性であったことは確かである。彼は彼女について “I expect to pass some pleasant hours with her now and then : in which I feel I shall be of service to her in matters of knowledge and taste : if I can I will — I have no libidinous thought about her”<sup>10</sup> と思うところを述べている。知的で魅力的な年上の女性、そして彼を一人の詩人と認めてくれる精神的パトロンというのが Isabella Jones という女性ではなかったのだろうか。もしそうだとすれば彼女は Moneta であり Mneosyne であるといえるであろう。

最後に Fanny Browne であるが、彼女はキーツの狂おしく愛した恋人であり、婚約者であった。また彼女に宛てたキーツの愛の書簡はあまりにも有名である。キーツの Fanny に対する印象は次のようなものであった。

Shall I give you Miss Brawn? She is about my height — with a fine style of countenance of the lengthen'd sort — she wants sentiment in every feature — she manages to make her hair look well — her nostrils are fine — though a little painful — he[r]mouth is bad and good — he[r] Profil is better than her full-face which indeed is not full but pale and thin without showing any bone — Her shape is very graceful and so are her movements — her Arms are good, her hands badish — her feet tolerable — she is not seventeen — but she is ignorant — monstrous in her behaviour flying out in all directions, calling people such names — that I was forced lately to make use of the term *Minx* — this I think no[t] from any innate vice but from a penchant she has for acting stylishly.<sup>11</sup>

ここからうかがえる Fanny というものは、彼をうっとりさせ美人と言うよりもむしろ当時17歳（実は18歳3ヶ月であったのだが）というまだ少女っぽさを残したどちらかと言えば彼が *Minx* と呼びかけたように活動的で、服装とダンスに興味を示す極く普通の娘であったといえよう。文学的興味といっても当時の極く平均的な部類に属するもので、ゴシック・ノヴェルや、詩に関して言えば当時流行の Byron を好んだとのことである。この点においては Fanny は Isabella Jones とは大いに異

なる。また Jane Cox の一種の魔的な美しさを秘めた優雅さとも、Fanny の魅力は違ったものであった。

キーツにとって大変重要であったこれら三人の女性は、いま見たように皆その性格はそれぞれ異なっていた。しかし Aileen Ward が指摘している様にキーツが若くして失った母のイメージ、言い替えれば若くて美しいがどこか信頼性に欠ける女性、すなわち Fanny Brawne および Jane Cox の系譜と、落ち着いた年上の愛情豊かな祖母 Alice Jennings のイメージの延長にある Isabella Jones の系譜の二つが彼の心を占めていたことは明かである。これら二つの女性のイメージはキーツの詩作の上に大きな影響を与えた。最初に述べたように La Belle sans Merci 系の「宿命の女性」のイメージは Jane Cox—Fanny Brawne の系譜を象徴するのであり、一方母性的な愛情を象徴する女性(女神)、すなわち彼の詩の中で特に詩人(もしくは Apollo)の詩人としての成長に重要な影響力を行使する Mnemosyne および Moneta の系譜には、キーツの実生活においてやはり同様の刺激を彼に与えた年上の女性 Isabella Jones の姿が色濃く漂っているとと言えるであろう。

#### 4

最後にキーツの野心的長編 *Endymion* を彼の女性観という観点から考えてみようと思う。*Endymion* は1818年の出版時より様々な批評がなされてきた。確かにこの作品の包括的なまた決定的な批評と言うものは実際は無理なことかも知れないと思えるほど様々な意見、批評、解釈、見解が披露されている。理想美の追求のアレゴリーと見る者、神話的解釈を試みる者、詩人の想像力の成長の主題をそこに見る者、その外数え上げればきりがないうであろう。このことは逆に考えればまだ誰でも何か意見を差し挟む余地が残っていると言うことでもある。そこで本稿においてはその結びとして第四巻における Cynthia と Indian Maide の同一性という結末に焦点を当ててキーツにおける女性の意味を考えることとする。

*Endymion* は夢の中でみた女性(女神)に恋をし、彼女を求めて地下、海底を旅する。第四巻において美しいインドの乙女に出会いたちまち彼女を深く愛してしまう。しかし *Endymion* は夢の中で見た女性への愛と、インドの乙女への愛に彼の心が二つに引き裂かれる思いがして、大いに苦悩するのであった。その結果両者への愛を断ち切り一人で隠者となって暮らすことを決意したとき、インドの乙女は彼が夢の中でみたあの女性(実は月の女神 Cynthia)へと変容し、彼の愛した二人の女性が、実は同一の者であったことが明かとなるのである。*Endymion* と Cynthia は共に天へと昇って行き、この4000

行のロマンスは終るのである。

プラトンの理論を借りてこの物語を解釈すれば、美の実体である Cynthia とそのアイデアの影であるインドの乙女という関係がそこに現れ、両者の唐突な同一性の主張も一応諾けるのである。キーツもきっとその様なことを意図したのであろう。しかし私がここで問題としたのは *Endymion* の心の中で引き裂かれたままになっている二人の女性への愛の正体なのである。ここで *Endymion* の問題はまたキーツ自身の問題であったことも思い出さなければならない。つまりキーツ自身の心の中においても *Endymion* 同様、引き裂かれたままになっていた二人の母への愛が存在したと言うことを。結論めいたことを先に言うとしたら *Endymion* の結末における Cynthia と Indian Maid の同一性の証明は、Aileen Ward によって指摘されたキーツの中に存在する二人の母の「合一化」、「統合化」であり、彼の内なる一つの母の創造であったのではないだろうか。また一つの母のイメージの追求、希求がこの物語の形成の意識されない一つの要因となっているとも言えるのではないであろう。そうすれば *Endymion* の愛の告白を執拗に拒否するインドの乙女の言葉に現れる一種の道徳的禁忌のトーンはより良く理解できるかもしれない。

Believe, believe

Me, dear Endymion, were I to weave  
With my own fancies garlands of sweet life,  
Thou shouldst be one of all. Ah, bitter strife!  
I may not be thy love. I am forbidden,  
Indeed I am — thwarted, affrighted, chidden  
By things I trembled at and gorgon wrath.  
Twice hast thou asked whither I went. Hence-  
forth

Ask me no more! I may not utter it,  
Nor may I be thy love. We might commit  
Ourselves at once to vengeance; we might die;  
We might embrace and die — voluptuous thought!

*Endymion*, IV, 748-59.

何故インドの乙女はかくも *Endymion* の愛を退けるのであろうか。最後の結末を知れば知るほど彼女の拒絶は不自然なものとうつる。それはまるで *Endymion* を試すかのようなのである。確かに「美のイディア」を追求する者が単なるその「イディア」の影にすぎないインドの乙女への愛に満足してはならないという教訓と、真の理想美の追求者がどうかということを試す一つの試練であると考えられないこともない。いや、その可能性は甚だ大であると言わざるを得ない。だがそのように考えるとき、

Cynthia もインドの乙女も女神もしくは理想美といった地位から随分安っぽい女性に転落しないであろうか。またインドの乙女の拒絶にもかかわらず、Endymion は乙女への愛を棄てがたく苦悩し、隠者となることを決意することにおいて夢の中にあらわれた「女神」の探求をも放棄してしまうのである。乙女の拒絶は Endymion の理想美の追求になんら寄与してはいない。では何故 Endymion は乙女に惹かれるのか。彼が夢にみた女神を放棄するまでに。

乙女の言葉の端端に現れる禁忌の念は Endymion と乙女の間に愛がタブーであると暗示していると考えられる。そしてその禁じられている愛とは多分に性的な愛であるととれる。その意味からもこの乙女は、そのような愛が存在してはならない肉親に近い存在であることが想像できるであろう。一方夢の中に Endymion が見た東の間の女神の姿は、キーツが幼くして失った母親のイメージであったのであろう。母の死後、実際にキーツたちを育ててくれた祖母のイメージはインドの乙女へと結晶していったのかもしれない。いずれにしても *Endymion* 執筆時のキーツには Cynthia やインドの乙女の実在のモデルはいなかったことは確かであり、多分に形而上的にこの作品が解釈される理由ともなっている。しかしもし彼女らになんらかのモデルを敢えて求めるとすれば、キーツは彼の「二人の母」のイメージしか持ち合わせてはいなかったであろう。

キーツの詩に表れた女性というものを考えるとき、ともすると我々の目は La Belle Dame sans Merci とか Lamia, Madline, Isabella という主人公ともいえる恋する若く美しい女性達に向きがちである。しかし余り目だちはしないが作品の中でいかにも落ち着いた愛情ある眼差しで主人公たちを見守っている一群の女性達がいることを忘れてはいけぬ。本稿で取り上げた Moneta や Mnemosyne の外にも *The Eve of St. Agness* において Porphyro に忠告と援助を差し伸べる Madelaine の乳母 Angela, Endymion に対して優しい思いやりを示す妹 Peona がそれに当たるであろう。主として本稿ではこれら一群の女性達がキーツの祖母のイメージの延長上にあり、実生活においては Isabella Jones に彼はそれを見

たことを指摘した。またキーツが若くして失った母のイメージは現実の世界では Jane Cox, Fanny Brawne へと求められ、詩においては「宿命の女性」の系譜へと受け継がれていったことを示唆した。本来の母性を代表するのが実の母ではなく祖母であった、ということはキーツの生い立ちの特質を良く表しているといえよう。幼年期に父を失い、また引続き母を失ったという経験は確かにキーツにとって不幸なことであった。しかし祖母の存在がそれを救ったことはまさに幸いであった。キーツの作品の折々にさりげなく現れる愛すべき女性達、または主人公を静かに見守り、また時には警告を与え、彼を正しく導こうとする女神達に、我々は「宿命の女性」とは違ったもう一つのキーツの女性像を見出すことができるのである。

注

1. J. Lempriere ed., (rev. F. A. Wright) *Lempriere's Classical Dictionary of Proper Names mentioned in Ancient Authors* (London and Boston: Routledge & Kegan Paul Ltd, 1949)
2. J. M. Murry, *Keats and Shakespeare* (1925: Oxford University Press, New York and Toronto) pp.175-6.
3. T. S. Eliot, *The Use of Poetry and the Use of Criticism* (London: Faber and Faber Limited, 1964)
4. 上島建吉『虚空の開拓』(東京: 研究社, 1974)P.116.
5. *The Fall of Hyperion* I, 286.
6. *The Fall of Hyperion* I, 249-50.
7. Aileen Ward, *John Keats* (1966: Mercury books, London), pp.12-3.
8. *The Letters of John Keats*, ed. Hyder Edward Rollins, 2 vols. (Cambridge, Mass.: Harvard University Press, 1958), I, 395.
9. *ibid.* I, 396.
10. *ibid.* I, 403.
11. *ibid.* II, 13.

(受理 昭和62年1月25日)